

# 母なる女神、マリア

芸林 民夫

## 前書き

キリスト教の世界、特にカトリック教会の世界でイエスの母は崇拝されているが、スペインのようなラテン系の地域ではこの崇拝が極めて強く、女神に対しての礼拝と言える。カトリック教会ではイエスの母マリアを女神とする事は禁じている。神学的にはマリアは人間から生まれ、またいずれ死んだことで、女神ではなく人間とされるが、しかし一般的には女神のあるなしに関わらずかなりの力があると認めている。その力は息子であるイエスに祈る時にマリアを仲介して祈ることが効果があると思われている。しかしマリアに祈りを捧げている大勢の信者、特に一年を通して儀式や行列に参加するスペインの信者にとっては、昔の世界の女神同様、直接マリアに祈りを捧げている。

現在の一般の世界では「女神」(goddess)は昔の神話上の女神を指すか、または比喩的に使われるくらいで、女神が中心的存在であった時代を想像するのは難しい。紀元前5、6千年からギリシャ神話が固定化された辺りの紀元前7百年頃まで、現在の中東辺りにはたくさんの女神があったことが証明されており、社会は女神の思し召しで動いていた。それ以前の女神文化は農業が発達するようになった1万2千年前頃からと考えられ、大地は生命を生むのでその神は女性の神でありそれが地母神だった。時にその地母神はガイアのように中心の神であったが、時にはカナーンのアナト（女神）とバール（男神）のように母なる大地の神と空の神が組んでその文化を司った。その時代の人間は神たちが人間と同じような営みをすると考えて空の神と地母神が交わることによって、地上に生命が生まれ春になると信じていた。日本語の「稲妻」はこのことを指し稲が生まれるのは空の神からの雷の「稲光り」によって、母なる

大地は稲を孕むと考えられていた。地母神に対する崇拝は広く行われていたが紀元前3 - 1千年に急速な逆転が始まり、男神が女神の座を奪い始めた。これは農業民族ではなく特に狩猟採取民族に顕著に現れる。羊や山羊を飼っていたイブリット人（ユダヤ人）もそのひとつ。ユダヤ人は自分たちの神「ヤーウェ」崇拝を紀元前1千年頃シナイ半島からカナン地方に持って入り込んだらしい。（フロイト博士は「ヤーウェ」はエジプトのファラオであるアケナテンの神「アテン」と同一でモーゼはアケナテンの家臣の一人でアケナテンが死んだ後でユダヤ人に教えを伝えたという変わった説を唱えている）

けれどもまだ、ユダヤ人にもアセラ女神やヤーウェの妻であるシェキナ女神が居た。しかし紀元前5百年辺りにはアセラ神は司祭たちによって神殿から追い出される。聖書のイサヤ書27：1にはヤーウェが「レビアソン」と言われていた大なる母と思われる海の怪物を退治したと書かれている。これはバビロニアのマルデュック神が自分の母である地母神のテイアマットを殺して天の王になったと同じく男神によって天下を奪われる神話である。

エーゲ海周辺はドーリア人がギリシャ半島に自分たちの男神ゼウスを持って入り込む前には女神たちの縄張りだった。クレタ島のクノッソスにも大なる母が居た形跡もあり、ギリシャではアテナ神、ヘラ神、デメテル神やアルテミス神のような女神がゼウスによって格下げされ支配されるようになった。メデューサは女神でなくなり、ガイアとレアの地母神は歴史上に葬られた女神になった。オリンピアとデルフィの神殿は元々ガイアのものだったがゼウス神やアポロン神によって強奪された。デメテル神とその娘ペルセフォネ神だけは潜んで「エレウシニア」秘儀の中心となり、紀元後392年にキリスト教の皇帝テオドシウスI世によって禁じられるまで存続した。

地母神の中心的な機能は世界の生き物に生命を与えることにあった。それゆえに収穫と命を守る大事な女神となった。農業以前の狩猟採取民族でも、大なる母に生命の願いをしたことはウイレンドルフ・ビーナスのようなビーナス像が証明している。その大なる母は片方では暖かい保

護や愛情深い女神でありながら、もう片方では自分から離れ独立しようとする子供にはかなり手厳しい攻撃を加えたりもした。それから人間をその最後の死によって生まれた元の大地に戻すことすなわち、生命と死の双方を共に司った。そして人間は数千年間生命に関するあらゆる恵みを大なる母に頼ってきた。

男の神が天を取るようになった時でも、女神に対する崇拝が完全に消えたわけではない。インドではヒンズー教の母なる女神を男の神のパートナーとしてブラーマの妻としてバラサワタ、ビシヌにはラクシュミ、シバにはパルバティのように男の神より格は低いが、それなりの役割を持つ女神がいる。また信者の願いに答えて悪人をやつけるデビのような恐ろしい女神も居る。

日本書紀によるとイザナミが黄泉の国に行く前に日本人の祖先となった天照を生んだ。現在でも新嘗祭の時には日本国民の代表として、天皇が天照神に捧げ物をする伝統が続いている。

しかし、ヨーロッパと中東には今日ユダヤ教、キリスト教、イスラム教が広まりヤーウエ、キリスト、アッラーをそれぞれ「父親」と呼ぶも「母親」はいないという、いとも男神の世界である。

### マリアへの崇拝

ユダヤ教とイスラム教では神を「父親」と比喩的に使うけれども、キリスト教ではイエスは「神の子」と信じているから、当然母親の存在もあるはずだと思っている。しかしマリアに「神の母」と言う称号を考え出したのは後々の事で、最初のクリスチャンは、ただ「救い主」だけを望んでいた。それは当時のローマの支配からの開放とまた伝説のダビデ王の王国を再建してくれる「メシア」を求めていたからである。エルサレムの人々がイエスを「ダビデの子」とはやし立てるのを聞き、イエスが王の座を狙って政治革命を起こす恐れがあると危惧されて死刑を受けた。

ユダヤ人がローマに対する反乱に失敗した紀元後70年以降からクリスチャンたちは、イエスがユダヤ人の救い主の「ダビデの子」としてだけ

ではなく、世界中の民の救い主としての神の子であったと考えるようになった。それと同時に神の子に人間の母が居たことの神学的な理論が開始された。聖書にあるイエスの誕生時の話はイエスがローマ人を倒してダビデ王の跡継ぎとして新しい王国を興す「メシア」として生まれた事を位置づけるために出来たもので、実際あった話ではない。まず、ダビデの町である「ベツレヘム」で生まれることは大事であったが、ルカ書2:1によるとクリニウスがシリアの総督になった時に「ローマの属領地の民は自分の先祖の国に戻って国勢調査に参加するように」との命令を出した。その為に MARIA とヨセフがベツレヘムに行ったとされている。しかしローマの記録によるとクリニウスが総督になったのは紀元後6年のことだった。

マテオ書によるとヘロデ王は「東方の三博士」の話をした後でベツレヘムに兵隊を送り、その町の赤ちゃんを皆殺しにしている。

MARIA とヨセフはエジプトに逃げて、ヘロデ王が死んだ後でナザレに戻っているが、記録によるとヘロデ王は紀元前4年に死んでいる。すなわち、この伝説はユダヤの国を再建する為の政治的な運動に参加した人たちの間で、ユダヤの（旧約）聖書の「メシア」に対する予言を満たすように作り出された。

その当時教会は存在していなかったが、後に組織された教会がそれを「新約聖書」の一部と決めた事が MARIA を「神の母」と宣言する元になっている。

人間に対する神の計画の中の MARIA の位置やその役割の研究を「マリオロジ」と言う。これは「MARIA」と「テオロジ」（神学）と併せた言葉であるが、人によっては「MARIA」と「イドラトリ」（偶像礼拝）を併せた言葉だと言う。

MARIA はヨハネと一緒にエフェソスまで行って暮らしたとされ、現在でもエフェソスを訪ねる観光客は町はずれの「MARIA の家」を見ることが出来る。

言うまでも無く MARIA についての伝説は豊富にあり、MARIA は3世紀までに神話の大なる母のように人間に対する慰めや守りを与えるように

なった。5世紀に教会がマリアを「神の母」であると宣言し同時にマリアは「神」ではないとも定めた。それにもかかわらず、マリア崇拝が盛んになって、ほかの聖人より遥かに拝められるようになった。世界のキリスト教の教会の中にマリアの像やイコンはイエス並み、ところによってはイエス以上にある。

このような無認可の女神の身分を理解する為にマリアと昔の神話の中の女神の性格を比較する。

### 1) 神の母親

神話では通常神の両親も神でなければならない。例外として父親だけが神だったヘラクレスは死後父親のゼウスにオリンピアに上げられ神になった。母親が女神の英雄アキレスや先祖に神がいるギルガメシュは最後まで人間であった。そう見ればマリアが女神であることの理由の第一は「神の母親」と言われるからである。同じようにギリシャ神話の中のガイア神、レア神、アフロディテ神やエジプトの神話のイシス神も「神」を産んでいる。ガイア神は他の神々がまだ存在しなかった時に単為生殖でウラヌス神を生んだ。レア神はゼウス神を始め沢山の神や女神を生んだし、イシス（神）もマリア（神？）より遥か以前に聖なる息子ホルス神をひざの上に乗せた絵や彫刻になっている。

言うまでも無く、ガイア神の初産以外にはその女神たちに相手となる男神が居た。そこで人間と思われるマリアがどうして神を産むことができたかが神学的な問題になる。ゼウス神は人間の女性との間によく子供をもうけたが、みんな神ではなく人間として産まれた。ヘラクレスは死んでから父ゼウス神によってオリンポスに上げられ神になったが、イエスは生まれつき神であった。マリアの卵がヤーウエの精子を難なく受け入れて普通の人間のお産で（と言っても、マリアの「永久処女」宣言によると、普通分娩ではなかっただろう）神イエスを産んだ。マリアは神の「奥さん」にはならなかったが「神の母」となった。生物学的にそれを考えると同じ種の動物同士間でしか子が出来ないの、マリアと神は少なくとも同じ「(人)種」であると言う事になる。

プロテスタント側でマリアはイエスの「神性」ではなく「人間性」を産んだと言い、カトリック教会側は「性」を産むことはあり得なく「人」を産んだと反論する。431年のエフェソスでのキリスト教公会議でネストリアスが掲げた「イエスは神ではない、従ってマリアは神の母ではない」との説を異端信仰として退け、マリアが「神の母」であることを信仰箇条のひとつに定めた。

## 2) 罪の無いマリア

女神が罪の無い者であることは当たり前で女神である以上は咎められない。罪とは神の掟に背く事だとすれば、神自身が自分の思し召しを破ることはないし自分に「罰」を与えることはあり得ない。ギリシャ神話の中の女神は人間の道徳を無視することがよくある。アフロディテはかなりの結婚外の関係を持つが、女神の身分から降ろされることも無く罰も無い。(旦那のヘファエストス神が妻のアフロディテと愛人のアレス神を捕まえて、網に入れて他の神に見せて笑いものにしたとホメロスのイリアスの中で語られているが、これが罰かどうか)

カトリック教会の法王ピオⅨがマリアは「無原罪」と宣言して、それを信仰箇条にしたのが1854年であった。その目的は「神の母」宣言によって「ただの人間ならどうやって神を産むのか？」の問題解決の為であったろう。この宣言でマリアは人間より上に引き上げられたことになった。三日月の上に立っているマリアの姿は法王が夢の中で見たものだということで、無原罪のマリアの象徴とされアイコンになっているが、見ると月の形の弓を持っている月の女神アルテミス神を連想する。

「無原罪」と言うのはマリアは生まれつき罪の無い状態と言うだけではなく、アダムとイブが神の掟を破る前の状態であると言われる。聖書の中の神の言葉に「私に似せて作りましょう」と言って人間を作ったとある、すなわち教会はマリアが神であることを否定しながら、神に似ていると宣言する。教会用語の中でマリアは「礼拝」を受けるのではなく「崇拜」される。この違いは神学者にとっては意味があるだろうが、一般の信者にはその区別はできないだろう。

### 3) 永久処女

ギリシャ神話の中のガイア神は最初の神、ウラヌス神を処女で産んだがそれとマリアの処女でのお産とを並べることは無理ではない。しかしマリアの永久処女はただ男性と交わらないで妊娠しただけではなく、それに加えて、イエスを産んだ時にも彼女の処女膜は破られることはなく一生そのままだったという宣言である。教会は390年のミラノでの教会会議でイエスを産んだときに処女膜が破れたという説は異端説であると宣言し、その後中世期における教会の説を神学的に論じてそれを支持していた哲学者アキノ・トーマスにその神学的な裏づけを依頼した。

プロテスタントの信者のほとんどはマテオ書13：55にある「イエスと話がしたいと、外でマリアとイエスの兄弟が待っている」の文、またマテオ書1：25には「マリアは初子を産むまでにはヨセフと関係を持たなかった」との言葉を指摘してそれならマリアは他の子供も産んだと考えられるとし、マリアの永久処女を否定している。カトリック教会の解釈は「兄弟」とは従兄弟まで含んだ表現だとし「産むまで」とはその後にあったとは言っていないと固執する。

アキノ・トーマスの理論ではイエスのお産のときでもマリアの処女膜は破られなかったとされているが、それはその時代の女性の処女に対する宗教的な考え方が現れている。キリスト教の始めから性行為は卑しいと思われ、出来ればしないことが理想とされた。

そこでマリアはイエスを産む前も後もセックスという卑しい行動はしなかったと考えた。聖パウロは「人はその卑しい行為をしないのが理想だが、それが無理なら結婚した方が良い」（実際には「燃えるより、結婚したほうが良い」と書かれている）と書いたがやはり性は聖にならないというのが現在までの教会の非公式な見方である。

古代の世界にはこのような考えが多かった。神話の中でも大なる母はよく処女である。結婚する女性の守護女神であるアルテミス神は24の乳房を持ちながら、極端的に処女性に固執して永久処女を誓い、うっかりと彼女の裸を見てしまったアクティオンを恨み殺した。ローマ市の中心に祭られた、炉と家庭を守る女神であるヘスティア神（ローマではヴェ

スタと呼ぶ)の神殿でローマのシンボルの火を守っていたのは処女を誓った巫女たちであった。

#### 4) 豊饒の女神

豊穰の女神は自然に対する力を示す象徴的な物をシンボルとして持っている。ヘラとデメテルは穀物の束を持ちアフロディテはリンゴを持っている。更にガイア神はオリンピックでの競技の優勝者にはオリーブの葉で出来た冠を与え、デルフィの競技優勝者には月桂樹の葉の冠、コリントでの賞はセロリの葉の冠であった。マリアは特に収穫の守護の女神と見られてはいないが、農業地域ではその収穫を守る女神として見られている。スペインのマラガでは「カンニャのマリア」として拝められている。「カンニャ=caña」は砂糖黍の茎の意味で「カンニャのマリア」の日には御輿の上のマリアは竹のような棒を持ち、行列に参加する人たちも揃ってカンニャを持って練り歩く。

#### マリア崇拝の形態

ヨーロッパでは中世からマリア崇拝が盛んになって来た。マリアの「イ



図1. カンニャを持っているマリア



図2. カニャと穀物を持っている  
デメテルと娘ペルセフォネ



コン」(絵)は特に東ヨーロッパのギリシャ聖公会などで盛んに使われていた。そのイコンはイエスを抱きながらもマリアを厳格な天の女王のよう重々しいものとして表していた。西洋ではもう少し人間に近い表現になっていた。パリのノートル・ダム寺院北口の上部にはマリアが悪魔か人間の敵に対して刀を振り上げている姿が彫られている。現在の信者から見るとこの姿はマリアに似合わないと思われるが、マリアの保護に頼る人にとっては心強い姿であろう。

14-15世紀のイタリアのルネッサンスで、初めてマリアの服の胸を少し膨らませて描いたのはジョットであったが、その後ラファエロはマリアを美人として描いたし、レオナルドはイエスに授乳しているマリアを描いた。しかし、マリアの人間性を強調するのもそこまで、マリアを裸にした画家はいなかったし、アフロディテのような性的な雰囲気では表現しなかった。ただ、マリアの顔を如何に美しくするかはスペインなどの彫刻家達が今でも競い合っている。

ヨーロッパ全域には「ノートル・ダム」や「ヌエストラ・シニョーラ」などのようにマリアの名前をつけている教会は多く、ルネッサンス以来



図3. セイントペトルスブルグのエルミタージュ美術館にあるダビンチのイエズスに乳を吸わせているマリア

カトリック信仰が弱くなっている一方でマリアの崇拝がますます強くなっている。その間、マリアは天から下って度々信者の前に姿を現すようになった。特に有名なのはフランスのルルドで、1858年にベルナデットと言う羊飼いの少女の前に現れ奇跡を起こし、現在まで信者の巡礼の地となっている。また1917年にポルトガルのファティマで同じく羊飼いの3人の子供たちの前に現れやはり巡礼地となっている。スペインでは、マリアへの崇拝は町の中を通る行列にも見られる。2006年復活祭の前の聖週間のマラガ市には48の行

列があった。その行列はイエスの受難と死を記念するものであるが、中心の御輿には涙を流して悲しみにくれるマリアがいる。その姿を見た沿道の人々から「グアッパ!グアッパ!」と声が掛かる。(スペイン語で「グアッパ」は「美しい」の意味)

マリア崇拜の1つに「リタニー」があるが、これは司祭などがマリアの「枕詞」を次々と唱えそれに会衆が唱和して祈るものである。このようなリタニーの中には、マリアを女神として見ているようなものもある。例えば「キリストの母」;「聖なる恵みの母」;「いとも清い母」などはマリアがイエスを生んだことと処女であることへの賛辞であるが、「天より大きい母」や「永遠の栄光の母」また「天と地の教会の母」は人間性を越えた言い方ではないか。「天の淑女」は神聖的な意味としか受け取れないし「知恵の元」はアテナ神と同じ枕詞。「生命を新しくするもの」は豊饒の女神に対する言い方であろう。「天の門」や「門を守るもの」はマリアの神性な権威をいう言葉である。「父なる神の娘、息子の神の母、聖霊の神の配偶者」とまで言えば、三位一体を繋ぐ者すなわち4番目の神ではないか。

## 結論

カトリック教会の中でのマリアは現代の女神である。古代ギリシャやローマやエジプトの女神や現在のインドのヒンズー教の女神たちと変わらない働きをしている。

スペインではマリアが息子のために涙を流す母の姿がある一方でその着ている服は女王の服そのもの。一つの教会の中にマリア像は5-6体もあり、それぞれの枕詞 {無原罪} や {海の星} や「希望の母」のマリアに合わせて服や小道具がしつらえてある。マリア像を作る美術家は競い合ってマリアの顔や姿を美しくしようとする。復活祭の前の「聖週間」の間の行列で運ばれるマリアの山車も飾られた金と銀で光り天の女王にふさわしい「玉座」になっている。(実際にスペイン語でその山車は「トロノ」(玉座)と言う。)

しかし歴史上だけではなく、信者にとって現在でもマリアは一番の祈

## 母なる女神、マリア

りの先であり、それに答えて天国（オリンポス山？）から度々降りて人間の前に現れ恵みを与えてきた。マリアの出現の場所は今も沢山の信者の巡礼先となり特別な恵みを願う所になっている。最近カトリック教会はマリアによって病気が治る事を「奇跡」と呼ぶのをやめて、「説明できない治療」というようになった。これについてあるテレビで巡礼先の一つであるルルドの役員の話として「ここで毎日沢山の人が治っているがその一つ一つを奇跡と証明する手続きが多すぎるから、止めました」と紹介していた。

マリアが「神」ではないと言いながらも暗殺未遂事件の後で法王ヨハネ・パウロⅡがファティマのマリアに命を守ってくれたことへのお礼の巡礼をしたことは不思議なことである。教会の神学者がいろいろ言っても、信者は勿論、聖職者まで母なる女神、マリアを頼りにしている。